

説明よりも中国思想からの説明が優勢になりつつあること、そして全体の構造を生み出した思想への関心が高まっていることが指摘できよう。

「否定」の宗教学

関 一 敏

鈴木大拙は「現成世界の否定性」にこそ宗教的なものの本質(霊性)がみられるとした。禪や浄土系思想と比べて神道はこの点で幼く、生命や大地に根ざすという一方の条件をみたりつつも自己否定の経験がない、いまだ病氣にからぬ嬰兒の段階にあるという。この主張から家永三郎の指摘が想起される。日本思想に否定の論理がもたらされたのは仏教によってであり、渡来以前の太古人は「連続的世界観」と「肯定的人生観」を特徴としていた。黄泉国・常世国は国土の延長として連続的にとらえられ、罪穢の凶事も容易に祓い浄めうる。そこには現実界の否定による超越世界は成立していない。

宗教史における否定の問題をもう少しゆるやかにエピソード的な厚みで考えてみたい。ウパニシャッドの哲人ヤージュニャヴァルキヤはその妻にアートマンの何たるかを伝えるに「非ず非ず」の否定形を用いた。もう一人の哲人ウッダーラカ・アートマンがその息子に比喩の多用(水中の塩など)によってアートマンの存在に気づかせる手法をとったことと照らせば、これを表現と伝達の技法としての否定形と云うことができる。同じや

り方はキリスト教の否定神学にもみえる。「神はあれでもなくこれでもない」(エックハルト)。問いそのものを拒む例も多い。先のヤージュニャヴァルキヤは世界の構造について問いつづける者を諫めた。「問い過ぎてはいけない。あなたの首が落ちてしまふといけないから。あなたはそれをこえて問うべきでない神格について問うているのだ」。これを別名「問いの底」とよぶこともできるが、問わないという不行為の勧めにおいて「毒矢の喩」にみえるブッダの無記に通ずる。もともと前者は問いの不可能性を、後者は無用性を説く。

行為の否定もしくは不行為の勧めが文脈によっておおいに積極的な意義をもつことは、仏教でもジャイナ教でも五戒の一番目にあるアヒンサ(不殺生)にみてとれる。これを非暴力として現代化したガンジーは「刃渡りのように困難な」その実現にふれている。不行為ゆえに目立たず、よって証言が歴史に残りにくい否定的実践は、同時に強力な政治的实践たりうるという逆説的な可能性をひめている。より微弱な形だが、政治学者ウオルドロン「の「よきサマリヤ人」の再話にいう「受動的さしひかえ」の不行為もこの系譜に属する。

否定神学は「否定の道」とよばれる。ネガティヴの訳語は否定的あるいは消極的が多く用いられるが、より分かりやすいイメージは写真用語のネガである(「ネガティヴな儀礼・禁忌・○○するな」と「ポジティヴな儀礼・供儀・○○せよ」の対比。これが写真用語のネガとポジに対応することについては拙稿「神と社会をつなぐもの」一九八〇)。よって否定神学とはネガによってポジを現像(現象)させる方法である。

冒頭にあげた大拙の否定性とこれらとのつながりは、ソシュールの「分節言語の否定性」を介すればはつきりする。コトバは対比の相関性において働くから、それぞれが写真のネガのように機能する。分離と接合を同時に実現する分節の端的なかたちは、創世記冒頭にあるような二分法（光と闇、空と水、陸と海、昼と夜など）である。すなわちポジとネガの仕分けの累積によって連続性が分節され、カオスからコスモスへと移行する。分節されたコスモスは世界認識の自在な力をひとに与えるが、同時に分節の実体化・固定化による大いなる不自由をも強いるだろう。この不自由を免れるツテを宗教史に求めた井筒俊彦は、分節Ⅰ→無分節→分節Ⅱという一種の螺旋運動に注目した。大拙の否定にはこのいったんの否定（すなわち無分節化）がこめられており、その媒介を一時の病に喩えたのである。かくして不行為の勧めのその先にある、コトバによらない否定、行為による否定は可能かという問いは、この観点から再度、発せられなければならないまい。

宗教存続のメカニズム

——民族宗教の場合と制度化の意味——

小田 淑子

（1）考察の目的 創唱宗教は制度化して存続するが、制度化は民族宗教や古代宗教には妥当しない。だが、どの宗教も存続する。宗教の存続は親から子供への世代間伝承を意味する。

宗教の存続は定義にも理論にもないが、宗教の特徴の一つとして考察するに値する。第一に、宗教という知・真理の特異性を示す。宗教思想は哲学に接近するが、この存続のあり方を考慮すると、宗教という知と哲学知との相違が明らかになる。第二に、存続する宗教は慣習としての日常的な宗教である。第三に、存続という特徴が看過されてきた理由を考えたい。それはあらゆる宗教に内在する特徴でありながら、宗教内部の信仰者自身には死角のように意識されないのではないか。

（2）存続の様態 教義も教団制度ももない古代宗教や先住民の宗教は、誕生した子供を自動的に成員に加え、儀礼を繰り返すだけで存続する。子供は祭りに参加しつつ、教義を学ぶこともなく、神々の存在や世界観などを受けとめる。世界宗教の非合理的な真理も世代間伝承においては洗練された教義ではなく、礼拝や墓参など儀礼を通じて子供にも感じ取ることができる類の知である。存続をもつとも顕著に観察できる場面は、創唱宗教の初代弟子から次の世代への伝承であろう。世界宗教も新宗教も存続した事実、新規に改宗者を獲得し続けただけではなく、子供への伝承による。子供を育てる際の基本的姿勢がその宗教の真理である。幼児洗礼のように、親はわが子を信仰者として育てる。親にとってはそれが当然の人間の生き方だからである。かくして、第二世代以後は主体的選択ではなく、親の宗教を真理として受け入れていく。信仰の弛緩は避けられないが、宗教は安定する。日常性の中の宗教である。子供にとっては自分の意思によらない宗教への加入であり、近代以後には時に自嘲的、時に反抗的な態度を示すが、この素地はもつと評